

干潟の名称	富津
干潟の所在地	千葉県富津市
干潟の面積	およそ 200ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	砂
干潟植生	沿岸植生：ハマヒルガオなど砂浜植物 干潟植生：コアマモの大きな群落がある。潮下帯にはアマモ群落も存在する。
干潟の特徴	東京湾湾口部に突出する長さ約 5km の砂嘴、富津岬の北岸。陸から沖に向けて sand bar が 2~3 あり、sand bar の間は低くなっている。陸側は砂浜でその上は護岸、あるいは砂浜植物帯から松林に移行する。小糸川に通じる水路及び富津漁港への航路で東と西に分断されているが、航路の東西で生物相大きな差はない。底質は 20cm の深さまで酸化していたが、コアマモ群落内の底質は表層 7cm より下は還元的だった。
生物相の特徴	潮間帯上部にはコメツキガニが生息するが、密度は高くない。中部では高密度にタマシキゴカイの糞塊やスゴカイイソメの棲管が見られるが、コアマモ群落内ではゴカイ科多毛類が優占した。干潟の最も沖合いではバカガイが優占した。水路沿いの幅約 5m の砂泥干潟は、面積的に狭いため測線は取らなかったが、ホソウミニナの生息が見られた。
調査者氏名	風呂田利夫、飯島明子、中山聖子、木下今日子、森上需、小林俊介、中山智敦
調査年月日	2002年4月28日、6月11日

干潟の名称	三番瀬
干潟の所在地	千葉県船橋市, 市川市沖 (A、B: 船橋側、C: 市川側 (C1: カキ殻島、C2: 沖の大洲、C3: 沖の大洲南))
干潟の面積	およそ 250ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟
干潟の底質	細砂, 一部多量の貝殻を含む
干潟植生	なし
干潟の特徴	東京湾奥部に広がる浅瀬 (三番瀬) の一部が干潟として露出する。海岸部はすでに埋立が進み、残存の干潟はかつての前浜干潟の低潮域に相当する。中央部には江戸川の人工放水路が開口し、洪水時の放水により泥淡水の流入があり、また青潮の侵入もあり干潟環境は安定しない。船橋側干潟は、人工海浜もしくは防潮堤と連続して沖合い約 1km にわたって広がる細砂干潟で、港湾工事の土砂排出により覆砂されたところである。蠣殻島は放水路河口に自然に堆積してできた洲で、底質はカキやアサリなどの貝殻からなる。沖大州は三番瀬浦安側の沖合いに自然に形成された最沖部の洲で、底質は砂質であり、波による物理的攪乱が大きい。
生物相の特徴	干潟面の低さを反映して、二枚貝類が優占する。主な二枚貝類は、シオフキ、アサリ、バカガイ、マテガイである。また、船橋側においては干潟表面に高密度なタマシキゴカイの糞塊がみられる。
調査者氏名	風呂田利夫、飯島明子、西 栄二郎、中山聖子、木下今日子、梶本輝樹
調査年月日	2002年5月26日

干潟の名称	相模川河口
干潟の所在地	神奈川県平塚市
干潟の面積	300ha 未満
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	粗砂、砂利
干潟植生	なし
干潟の特徴	相模川河口の相模大橋付近東岸にかつてあった干潟は、現在では著しく規模が縮小している。底質に泥は全くなく、径 1~3mm の砂利が多い。岸边は砂浜であり、その上には砂浜植物がわずかに生える。相模川に流れ込む水路岸にヨシ原があるが、大潮干潮でもヨシ原際まで水が迫り、潮間帯はほとんどない。
生物相の特徴	干潟上の石の下に <i>Platochestia</i> 属の 1 種とケフサイソガニが、石の上にイシマキが見られた他は、ほとんど無生物と言って良い状態であり、底質中からはヤマトカワゴカイらしき種と <i>Notomastus</i> 属の 1 種がわずかに採集されただけである。二枚貝は全く生息が認められなかった。ヨシ原ではアシハラガニ・アカテガニ、カクベンケイガニが見られ、クロベンケイガニはやや多く、フナムシも採集された。またヨシ原内の砂地には、コメツキガニが見られたが、個体密度は高くなかった。
調査者氏名	飯島明子、中山聖子、工藤孝浩
調査年月日	2002年6月23日

干潟の名称	野島
干潟の所在地	神奈川県金沢区野島
干潟の面積	およそ7ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟, 河口干潟
干潟の底質	細砂(前浜干潟)、泥(河口干潟)
干潟植生	なし
干潟の特徴	野島海岸には自然の沖合い約150mの小規模な前浜干潟が広がる。無料の潮干狩り場として市民の自由な採貝が行われており、アサリなどの二枚貝に対する人的採集圧力は極めて高い。野島水路は平潟湾の鷹取川河口に位置するが、かつては人為的に水路は閉鎖されており、近年開口された人工的要素の強い水路である。この水路両側には幅10m程の小規模な泥干潟が岸に平行に走る。
生物相の特徴	アサリ、カガミガイ、シオフキの生息密度が高く、またアラムシロも高密度に生息する。アサリは自然状態での再生産に依存しているが、高い採集圧力にも係わらず毎年安定した加入と成長が見られる。水路干潟ではチゴガニが多く、一部の砂質のところにはコメツキガニが見られる。この水路上流部にはホソウミニナの生息がみられる。
調査者氏名	風呂田利夫、西栄二郎、小賀坂理恵、小林俊介
調査年月日	2002年7月13日

干潟の名称	谷津干潟
干潟の所在地	千葉県習志野市
干潟の面積	34ha
干潟の地形タイプ	潟湖干潟
干潟の底質	全体に泥質の部分が多く、水路の中と水路岸近くのみ砂泥質となっている。泥は深く、調査地点では膝近くまで埋まる所もあった。調査地点外では胸まで埋まる所もあるという。泥の下には固い基質がある。酸化層はごく薄く、数mm程度である。アオサに覆われている底質表面には酸化層が認められない場合もあり、還元層は漆黒のヘドロ状、硫化水素臭が強烈である。
干潟植生	干潟の北西岸にヨシ原がある。南岸にも小規模なヨシ原がある。干潟全面を覆いつくすようにアオサが繁茂する。
干潟の特徴	谷津干潟は周囲を道路・住宅地に取り囲まれ、東端の水路でのみ東京湾と連絡している。かつては家庭排水が流れ込んでいたが、現在では淡水の流入がない。数年前からアオサが干潟表面で繁茂するようになり、現在では水路の岸辺を残してすべてアオサが干潟表面を覆っている。枯死したアオサが腐敗して、干潟周囲には強烈な悪臭が漂う。密生したアオサの群落にせき止められ、大潮でも干潟表面から水が引ききらない。
生物相の特徴	干潟表面から水が引ききらないことと、アオサの繁茂により、独特の生物相となっている。アオサ葉上に端脚目の1種（ヨコエビ亜目）が無数に生息し、ブドウガイも多く見られる。チチュウカイミドリガニの小型個体も多い。アオサが被覆する場所では、底質への酸素供給が減少して黒いヘドロ状となり、底質中に二枚貝類は見られなかった。多毛類は全体的に少ないが、ミズヒキゴカイと <i>Glycera</i> 属の1種、コケゴカイは測点によっては多く見られた。一方、アシナガゴカイと <i>Notomastus</i> 属の1種は個体密度が低かった。水路およびその岸辺の砂泥底では、オオノガイ、ヒメシラトリ、ソトオリガイ、ホンビノスガイなどの二枚貝や、ヤマトオサガニ、チゴガニ、コメツキガニ、ユビナガホンヤドカリなどが出現した。特にヤマトオサガニは、アオサが干潟全面を覆う前には広範囲で高密度に生息していたが、現在は水路周辺などアオサの被覆のない限られた場所にしか見られない。
調査者氏名	飯島明子、有田、中山智敦、内野 透
調査年月日	2004年6月18日

干潟の名称	江戸川
干潟の所在地	千葉県市川市
干潟の面積	約21ha
干潟の地形タイプ	入江
干潟の底質	砂泥・泥
干潟植生	沿岸：ヨシ原
干潟の特徴	上流部の可動堰で江戸川本流と隔てられている。通常可動堰は閉じており、河川からの淡水の流入はないため、河口ではなく実質上入江である。台風などで江戸川の水位が上昇し洪水の危険がある時のみ、可動堰が開いて淡水が激しく流れ、淡水と底質の攪乱により底生生物の分布にも大きな影響があると言われている。最近では、1998年、2002年に可動堰が開いた。
生物相の特徴	下流側（Line A, B）は砂泥地が多く、上流 Line C は深い泥地だった。全体に二枚貝と多毛類が優占し、泥地では****・ヤマトオサガニ・カワザンショウ科の1種も多く見られた。Line C 岸边にはヨシ原があり、ベンケイガニ類が生息していた。Line B と C の間には広くヨシ原が発達し、ヨシ原際の砂地にはコメツキガニが生息していた。潮下帯浅所にカキ礁があり、その中に移入種ホンビノスガイが多数生息していた。かつてウミニナ・フトヘナタリ・カワアイが生息していたが、1990年以降発見されていない。
調査者氏名	風呂田利夫、飯島明子、梶本輝樹、中山智敦、内野 透、宇佐美 葉
調査年月日	2003年4月21日、5月4日

干潟の名称	盤洲
干潟の所在地	千葉県木更津市、袖ヶ浦町
干潟の面積	約 2800ha
干潟の地形タイプ	河口干潟、前浜干潟
干潟の底質	細砂もしくは砂。植生奥には泥質部もある。
干潟植生	陸側の塩性湿地では、ヨシもしくはアイアシの群落が発達し、前浜干潟表面には一部にコアマモの群落が見られる。
干潟の特徴	盤州外周を形成する前浜干潟と、盤州中央部に開く小櫃川河口の塩性湿地からなる。1980年代、小櫃川上流に亀山ダムが建設された。塩性湿地の先端部は浸食が進み、湿地全体が後退傾向にある。
生物相の特徴	アサリ、シオフキ、バカガイ、マテガイなど二枚貝が多く見られる。ウメノハナガイも多く見られる。ホソウミニナが高密度に生息している。一時絶滅したと考えられていたウミニナの生息が、今回確認された。塩性湿地にはハサミシャコエビ、アシハラガニ、ヤマトオサガニ、チゴガニが群生し、フトヘナタリ、ウモレベンケイガニなどの希少な動物も出現した。1980年代までは生息していたイボウミニナ、ヘナタリの生息は、近年確認されていない。
調査者氏名	風呂田利夫、内野 透、益子直樹、中山聖子、榎本輝樹
調査年月日	2004年7月16日、7月31日、8月1日

干潟の名称	夷隅川
干潟の所在地	千葉県夷隅郡
干潟の面積	約5ha
干潟の地形タイプ	外洋に面した河口と通じる水路・潟湖
干潟の底質	砂泥・泥、一部は砂
干潟植生	岸辺にヨシ
干潟の特徴	夷隅川本流岸辺はコンクリートと石で護岸されており、干潟は出なかった。河口南側の水路（Line A）岸も護岸されているが、幅の狭い砂泥の干潟があり、ヨシも生えていた。水路奥には護岸はなく、ヨシ原と小規模な泥干潟が発達していた。本流北側潟湖（Line B）では、本流寄りに砂泥・砂干潟があり、奥には泥干潟が発達していた。潟湖は砂丘で外洋と隔てられており、陸側から奥にかけての西岸にヨシ原が発達し、海側の東岸（砂丘）にはハマニンクヤスイバの1種、テリハノイバラなどが生えていた。ラグーンには河口から水が流れ込む他、この砂丘を透過して外洋水が流入していた。
生物相の特徴	南側の水路（Line A）の河口付近ではイソシジミやコメツキガニが優占し、オサガニも見られた。水路奥の泥干潟では、ヒラドカワザンショウとニホンドロソコエビが優占していた。特にニホンドロソコエビは、見渡す限りびっしりと穴を掘って生息しており、平米当たり約3万個体の密度だった。ここでは周囲の盛り上がった巣穴（大型甲殻類と思われる）も多数見られたが、穴を形成した生物を掘り出すことはできなかった。北側の潟湖（Line B）では、砂泥地にイソシジミが、泥地にヤマトオサガニが多く見られた。砂泥地ではニホンスナモグリの巣穴も多かった。Line A、Line B共に、泥地に <i>Hediste</i> 属、 <i>Heteromastus</i> 属、スピオ科、ケヤリムシ科多毛類が出現した。Line A 近くのヨシ原にはヒラドカワザンショウが見られたのみだったが、Line B 近くのヨシ原には、ヒラドカワザンショウ、クリイロカワザンショウの他、ケフサイソガニ、クロベンケイガニ、カクベンケイガニも見られた。全体に、生物の種数は少ないながら、個体数は多かった。
調査者氏名	飯島明子、高山順子、小林俊介、中山智敦、宇佐美 葉
調査年月日	2003年6月3日

干潟の名称	一宮川
干潟の所在地	千葉県長生郡
干潟の面積	約2ha
干潟の地形タイプ	外洋に面した河口干潟・河口に流れ込む水路岸
干潟の底質	本流岸は砂泥、所により砂。水路岸は粗砂。塩性湿地内は泥。
干潟植生	本流岸にヨシ、塩性湿地内にヨシ原
干潟の特徴	一宮川本流の岸 (Line C)、川に流れ込む水路岸 (Line A)、川と水門で繋がる塩性湿地 (Line B) のそれぞれに、小規模な干潟があった。Line A, C 岸はコンクリート護岸だった。Line A の底質は粗砂で、岸にヨシは生育していなかった。Line B は深い泥干潟で、岸辺にヨシ原の発達が見られた。Line C (本流岸) はかつて泥が多かったが、数年前に砂で被覆したという。Line C は砂・砂泥の底質にもかかわらず、酸化層が薄く、還元層は黒く硫化水素臭が強かった。Line C 護岸下にはヨシが生えていたが、大規模なヨシ原ではなかった。
生物相の特徴	Line C (本流岸) では底生動物相が貧困で、 <i>Hediste</i> 属、スピオ科複数種、シダレイトゴカイとコメツキガニが見られたのみだった。Line A (水路岸) ではイソシジミが優占し、多毛類は種数・個体数ともに少なく、 <i>Capitella</i> 属の1種、 <i>Heteromastus</i> 属の1種が少数出現したのみだった。またニホンスナモグリとケフサイソガニも見られた。Line B (塩性湿地) では、サビシラトリ、ソトオリガイ、ヤマトオサガニ、チゴガニが出現し、ケヤリムシ科の1種が大量に生息していた他、多毛類が種数・個体数ともに他のLineよりも多かった。ヨコヤアナジャコも出現した。Line B 近くのヨシ原では、クリイロカワザンショウ、ヒメハマトビムシ、アシハラガニが優占した。
調査者氏名	飯島明子、奥野淳児、小林俊介、中山智敦、小島 大、宇佐美 葉
調査年月日	2003年5月19日

干潟の名称	葛西沖
干潟の所在地	東京都江戸川区葛西
干潟の面積	約10ha
干潟の地形タイプ	前浜干潟（人工）
干潟の底質	砂泥または砂
干潟植生	東浜（測線A・B）では高潮部にヨシ群落が発達
干潟の特徴	江戸川と荒川放水路河口沖の浅瀬（三枚州）に人工海浜造成により形成された干潟
生物相の特徴	東京湾前浜干潟としてアサリ、シオフキ、マテガイなどの二枚貝の生息地であると同時に、****、ソトオリガイ、ヤマトカワゴカイもしくはヒメヤマトカワゴカイなどの汽水性の動物も見られる。出水時の塩分低下により、二枚貝類の生息は不安定。
調査者氏名	風呂田利夫、木下今日子、榎本輝樹、黒住耐二、西栄二郎
調査年月日	2003年7月13日

干潟の名称	小網代湾
干潟の所在地	神奈川県三浦市
干潟の面積	10ha
干潟の地形タイプ	入江干潟
干潟の底質	貝殻や小石混じりの砂泥、B1 とその近辺は粗砂。測点外 (Line B より北側) では泥が多い。歩きやすく、ほとんど埋まることがない。干潟兩岸 (南北) の近くでは、岩盤が出ている。
干潟植生	入江奥 (干潟東奥) にヨシ原、その奥は落葉広葉樹 (アカメガシワやヤマグルワ、フジなど) やメダケの混じる照葉樹 (シイ、マテバシイ、トベラなど) の林が、丘の上まで続く。干潟兩岸 (南北) の斜面も同様の樹林に覆われる。
干潟の特徴	油壺湾の北に位置し、湾入り口にはヨットハーバーがある。湾奥、東側の丘陵からごく小さな川が流れ込んでおり、その流域には建物がほとんどない。
生物相の特徴	潮間帯上部～中部にかけて、ホソウミニナが非常に多く見られた。チゴガニも多く、底質が砂質のB1 ではコメツキガニが卓越した。潮間帯中部～下部にかけてはアラムシロ、テナガツノヤドカリなどが多く、ツメタガイの卵塊やマメコブシガニも見られた。多毛類も潮間帯中部～下部に多く、 <i>Glycera</i> 属の1種、イワムシ、カタマガリギボシイソメ、タマシキゴカイなど、比較的大型の種が目立った。測点外の泥地ではヤマトオサガニが多かった。個体数はそれほど多くないものの、潮間帯下部ではテッポウエビやスジホシムシモドキ、クロホシムシやウニの1種が採集された。ハクセンシオマネキが生息しているという情報もあったが、今回は発見できなかった。ヨシ原内にはホソウミニナとクリイロカワザンショウ、アカテガニが多かった。特筆すべきは、底質中に二枚貝 (アサリ) の殻が非常に多く混じっているにもかかわらず、生きている二枚貝がほとんど見られなかったことである。
調査者氏名	飯島明子、工藤孝浩、中山聖子、中山智敦
調査年月日	2004年6月4日

干潟の名称	江奈湾
干潟の所在地	神奈川県三浦市
干潟の面積	10ha
干潟の地形タイプ	入江干潟
干潟の底質	全体に深い泥干潟である。特に潮間帯下部では浮泥に近く、膝まで埋まる。干潟表面は土壌のような褐色であり、細い針状の鉱物結晶が混じる。酸化層は1~5 cm、掘ると硫化水素臭がする。
干潟植生	湾奥に密生したヨシ原がある。潮間帯上部と下部には大型植物は見られないが、中部にはコアマモとオゴノリが生えている。特に南西岸（Line B 近辺）では底質表面を覆いつくしている部分もある。南西岸の斜面は落葉広葉樹の混じる照葉樹林である。
干潟の特徴	江奈湾の東半分は岩礁・転石海岸であり、西半分が泥干潟となっている。干潟南西側の岬で外洋の波が遮蔽されている。南西岸には岩礁や粗い砂の浜となっている。東岸は護岸され、車道が岸のすぐ上を通っている。
生物相の特徴	潮間帯上部~中部にかけて、ホソウミニナ、チゴガニ、ヤマトオサガニが多く見られた。アラムシロやユビナガホンヤドカリも観察された。コアマモの下などにケフサイソガニが見られ、ホトトギスガイの小規模なマットも存在した。多毛類は種数、個体数共に多く、ミズヒキゴカイや小型のツバサゴカイの <i>Chaetopterus</i> 属の1種が大量に出現した。A1にのみ小型後鰓類ヤミヨキセワタが多く出現した。潮間帯下部ではテッポウエビやハゼ科の1種が見られた。すべての地点でホトトギス以外の二枚貝類が全く出現しなかったことが、大きな特徴と言えよう。ヨシ原の中にはアカテガニ、クロベンケイガニ、アシハラガニなどが豊富に生息していた。
調査者氏名	飯島明子、中山聖子、中山智敦
調査年月日	2004年6月5日

干潟の名称	二見湾
干潟の所在地	東京都小笠原村父島（A：奥村川河口、B：清瀬川河口）
干潟の面積	300ha 未満
干潟の地形タイプ	河口干潟
干潟の底質	砂泥、転石（サンゴ礫）と砂泥
干潟植生	なし
干潟の特徴	<p>かつて二見湾奥に広がっていた干潟は、埋め立てなどにより、現在は奥村川河口と清瀬川河口にわずかに残るのみである。岸边は護岸されている。清瀬川河口（LineB）では一部石や砂の斜面があり、モクマオウが生えている。奥村川河口（Line A）、清瀬川河口（LineB）共に、表面が砂泥の部分でも掘ると石が多く、表面1～数cm下の底質は還元的だった。奥村川河口（LineA）の潮下帯はなだらかに深くなるサンゴ礫底、清瀬川（LineB）の潮下帯もサンゴ礫で急に深くなっている。測点の高さ（2002年8月8日満潮時（120cm）の水深）は、奥村川（Line A）St. 1 5cm、St. 2 56cm、St. 3 85cm、St. 4 87cm、清瀬川（Line B）、St. 1 干出、St. 2 14cm、St. 3 70cm、St. 4 102cmだった。</p>
生物相の特徴	<p>砂泥底とサンゴ礫間の砂泥中にはスナモグリの1種が生息していた。サンゴ礫底では転石の間や下にシワオウギガニとフタハベニツケモドキが優占していた。ムツハアリアケガニも見出された。河口の転石下にはヒライソモドキが生息していた。清瀬川河口では特に多毛類が多かった。満潮時に数cmの水深、あるいはほぼ干出している場所では、底質は土壌となっており、ベニシオマネキとミナミアシハラガニ、ミミズの一種が生息していた。ベニシオマネキは奥村川河口と清瀬川河口のそれぞれ最上部にのみ生息していた。</p> <p>なお、小笠原諸島中、人が住んでいる島では父島にのみ干潟が存在する。今回、二見湾奥の他、小湊海岸の八瀬川河口とブタ海岸に流れ込む小さな川の河口も観察したが、調査期間中はこの二つの河川の河口は閉塞しており、潮の干満の影響はほとんど受けていなかった。陸上から水際にかけては、この二ヶ所の河川では護岸されていない部分も多く、八瀬川ではソナレシバやシチトウイの群落も見られた。しかし生物の多様性は低く、八瀬川ではベンケイガニ類1種とハマトビムシ類、多毛類のみ、ブタ海岸では干潟表面にオオヒキガエルの仔ガエルしか見られず、10回掘り返して多毛類が一個体出現しただけだった。</p>
調査者氏名	飯島明子、木下今日子、稲葉 慎、鈴木暁音
調査年月日	2002年8月7、8日